

2012年2月26日 主日礼拝メッセージ

聖書箇所：第一コリント1章26～31節

説教題：弱い者を選ぶ神

1 何に目を留めるか

今日は午後から2012年度の予算総会が開かれます。新しい年度は、ここの1章27節を掲げて歩いていきたいと願っております。

なぜこのみことばなのか。おそらく誰もが感じる疑問であろうと思います。この教会は2003年の5月に開拓がスタートしました。まもなくちょうど九年を迎え、十年目の歩みに入っております。ふり返れば、その間いろいろなことがありました。私は、神学校を出たばかりで何の経験もありませんでした。そんな未熟な私は何度も失敗し、そのたびに皆さんに対し大変なご迷惑をおかけしてしまいました。今思い返すと穴に入りたくなくなるくらい恥ずかしいこともたくさんあります。そんな私は、教会の皆さんに支えていただき、育てていただいた者であると思わされております。

いろいろなことはありましたが、幸いなことに昨年一月には宗教法人として認められ、社会的にもきっちりとした土台を据えるところまで成長してきました。少しずつ、教会に加えられていく兄弟姉妹も増えてきました。細かなところではまだまだ課題はありますが、おおよそのところでは順調に成長してきているように見えます。

でも私たちはどんな者だったのでしょうか。目に見えない神を信じていると告白していながら、すぐに目に見えるものに心を奪われてしまう。それが私たちです。ですから順調と思えるときこそ、何度も原点に戻って確

認していきたいと思うのです。

2 この世が求めているもの

私たちがまだ信仰を持たなかったとき、どんな生き方をしていたでしょうか。パウロが26節で挙げているようなものを必死で追い求めておりました。パウロは三つあげております。

一つ目は「知者」とあります。智恵とか、知性、学力と言ってもいいでしょう。例を挙げるまでもありません。親たちは子どもの成績のことで一喜一憂しています。今まさに受験シーズンで、このことで悩んでいる方もいます。

二つ目は「権力者」。さまざまな「力」のことを広く指すことばです。もっとわかりやすく言えば「肩書き」です。名刺をいただければ、肩書きのところに真っ先に目が行きます。有名な人が亡くなると新聞で報道されます。しかし、私のような者が死んでもニュースになりません。確かに世の中は肩書きが力を持っています。

そして三つ目は「高い身分」。家柄とか血筋、家系のことです。北海道ではあまりないかもしれませんが、本州ではいまでも家柄にこだわる方がいると聞きます。例えば、自分の娘を身分の高い家柄に嫁がせることができれば、それは大いに自慢の種になります。

この手紙を書いたパウロはどうだったのでしょうか。パウロは小さな時から英才教育を受け、当時もっとも有名な学者であるガマリ

エルのもとで学んだと言われます。裕福な家でなければできません。そればかりではない。彼はユダ人でありながら、生まれながらのローマ市民の権利も持っていました。当時の人たちから見れば、これ以上もない高い家柄に生まれたことになる。そして皆さんもパウロの手紙を読んでわかるように、カミソリのように切れる頭脳の持ち主。キリスト者になるまでは、将来はパリサイ派の指導者になるだろうと思われていた人です。つまり彼は、私たちが望むこの世の幸せを全部手にしていたのです。

3 神が求めているもの

そのパウロがこう言うのです。27, 28 節。「しかし神は、知恵ある者はずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者はずかしめるために、この世の弱い者を選ばれたのです。また、この世の取るに足りない者や見下されている者を、神は選ばれました。すなわち、有るものをない者のようにするため、無に等しいものを選ばれたのです。」

先ほど、世の中の人たちは三つのものを求めていると言いました。ところが神はどうか。その三つを全部をひっくり返していきます。世の人たちは知恵を求めるけれど、神は愚かな者を選ばれた。世の人たちは強い力や権力を求めるけれど、神はこの世の弱い者を選ばれた。この世は家柄や血筋をことさらに尊ぶけれど、神はこの世の取るに足りない者、見下されているようなものを選んでくださった。

仮にパウロが、あまり頭がよくなくて、家柄も大したことがない、貧しい家の出身であったというのならどうでしょう。パウロが何か言っても説得力はありません。負け惜し

みにしか聞こえないでしょう。しかし実際は逆で、パウロはすべてを持っていた。その人がこう言うのですから、よっぽどのことです。

4 パウロの救いの経験

何がいったいパウロをここまで変えてたのでしょうか。

パウロもイエスに出会う前は、世の人たちとまったく同じ生き方を目指していた人でした。自分の家柄を誇り、人よりも優れた知性を密かに誇っていたはずです。これからのパリサイ派を背負って立つのは自分しかないというプライドもあった。それがキリスト者を迫害していく原動力でした。

そんなパウロが、やはりキリスト者迫害のためダマスコに向かっていたときのことです。突然、天からの光が彼を照らし、パウロは地面に倒れてしまいます。そして主がこう呼びかける声を聞きます。「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか。」パウロは戸惑いながらこう問いかけます。「主よ。あなたがどなたですか。」主は答えられます。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。」

主のことばに注意してください。「なぜわたしの羊たちを迫害するのか」とは言っていない。「なぜわたしを迫害するのか」です。どういうことですか。キリスト者が迫害を受け、拷問され、殺されていく。その時主は、私たちと一緒に迫害を引き受けてくださっている。私たちが苦しむとき、主も一緒になられて苦しんでくださっていると言っているのです。

パウロは、自分では神を愛しているつもりでした。キリスト者を根絶やしにすることこそが、神を熱心に愛することの証しなのだと思っていました。ところがなんと、パウロは、

「あなたは神を苦しめている」と言われてしまったのです。主を苦しめたのですから、パウロは神に対し罪を犯したことになる。主の声を聞いたとき、パウロはそのことにはつと気がつかされました。パウロの目が見えなくなったのも、それはもしかすると、自分が犯した罪の大きさにショックを受けてしまったためだったのかもしれませんが。

そのパウロのところにアナニヤが来て、手を置き、こう言います。「兄弟サウロ。あなたの来る途中、あなたに現れた主イエスが、わたしを遣わされました。あなたが再び見えるようになり、聖霊に満たされるためです。」パウロの目がもう一度開かれました。このようにして、パウロは自分の罪を知らされ、その罪を主が赦してくださったことを味わっていきます。

そして同時に大切なことを教えられました。パウロが追い求めてきた三つのもの。すなわちこの世の知恵、権力、身分、それは全部神を苦しめてしまうものであった。神はどんな者を選ばれたのか。なんと神に敵対していた自分を選ばれた。知恵があると誇っていたながら、実は神の前では愚かな者を選んでくださった。自分は強い者であると誇っていたけれど、実は何の力もなかった弱い自分を選んでくださった。すばらしい家柄を誇っていたけれど、主に会ったとき、そんなものは何の意味もない。自分は神の前で無に等しい者に過ぎなかった。そんな私を主は選んでくださった。

ですから、ここに書かれていることは頭で書いているのではない。すべて、パウロ自身が経験したことをそのまま書いているだけです。

5 最初の召しを思い出していく

パウロのように、奇蹟のような劇的な改心をされるかたはほとんど希でしょう。多くの方は、もう少し穏やかな方法で主の救いを確信していきます。しかし、救われ方はいろいろ様々であっても、主の救いはただひとつです。主がどのような者を召してくださるのか。時代が変わっても、神の召しは変わることはありません。私たちはこの世の愚かな者として召された。私たちはこの世の弱い者として召された。私たちはこの世の取るに足りない者、見下されている者として選ばれた。

でもどうでしょうか。いつの間にか私たちは忘れてしまっただけではなかったでしょうか。弱い者として召し出されたはずなのに、心のどこかでこう思い始めるのです。「やっぱり強くなければいけない。がんばらなければいけない。弱い自分をみせるなんてとんでもないことだ。そんな恥ずかしいことできません。」

無理もありません。私たちは小さな時からそんなふう育てられてきました。弱くなれと言う親なんていません。男の子だから泣いたらいけません。そう言われまして。あなたは長女なんだからしっかりしなさい。そうも言われてきた。気がつかないうちに、自分の中にそんな生き方がしみついてしまっています。キリスト者として歩むうちに、いつの間にかそんな古い自分が顔を出してしまいます。

だからこそ、いつも思い起こしていききたいのです。主はどんな者として私たちを召してくれたのか。愚かな者として選んでくれた。このことがどのような恵みになると思いますか。

こうなるのです。私たちが主の前に出ると

きは、愚かでいいということになる。弱い者として選んでくれたのですから、主の前では弱い者でいい。見下されている者が選ばれたのですから、神の前では見下されるような自分でいいということになる。何も無理をする必要はない。あなたのそのままの姿で主は迎えてくださる。どうですか、こんな楽な話しはないと思いませんか。主の前で重荷を下ろしなさいと語ってくださっているのは、そんな意味ではないですか。

私たちは、この恵みを一緒に味わっていきたい。愚かな者、弱い者、取るに足りない者である私たちに、主がどんなにすばらしい救いを与えてくださっていたのか、とも分かち合っていきたい。新しい年度の歩み、そのような歩みであることを願っております。